

2007年11月27日発行(毎月18回1と3と5と6と7と9の日)

通刊5355号

1983年7月19日第三種郵便認可

SSTK

発行 ならしの地域で生きる会

ふらっと

ならしの地域で生きる会は、
障害のある子も、障害のない子も
共に地域で学び、働き、
生活できることを願い
活動しています。

NO. 52

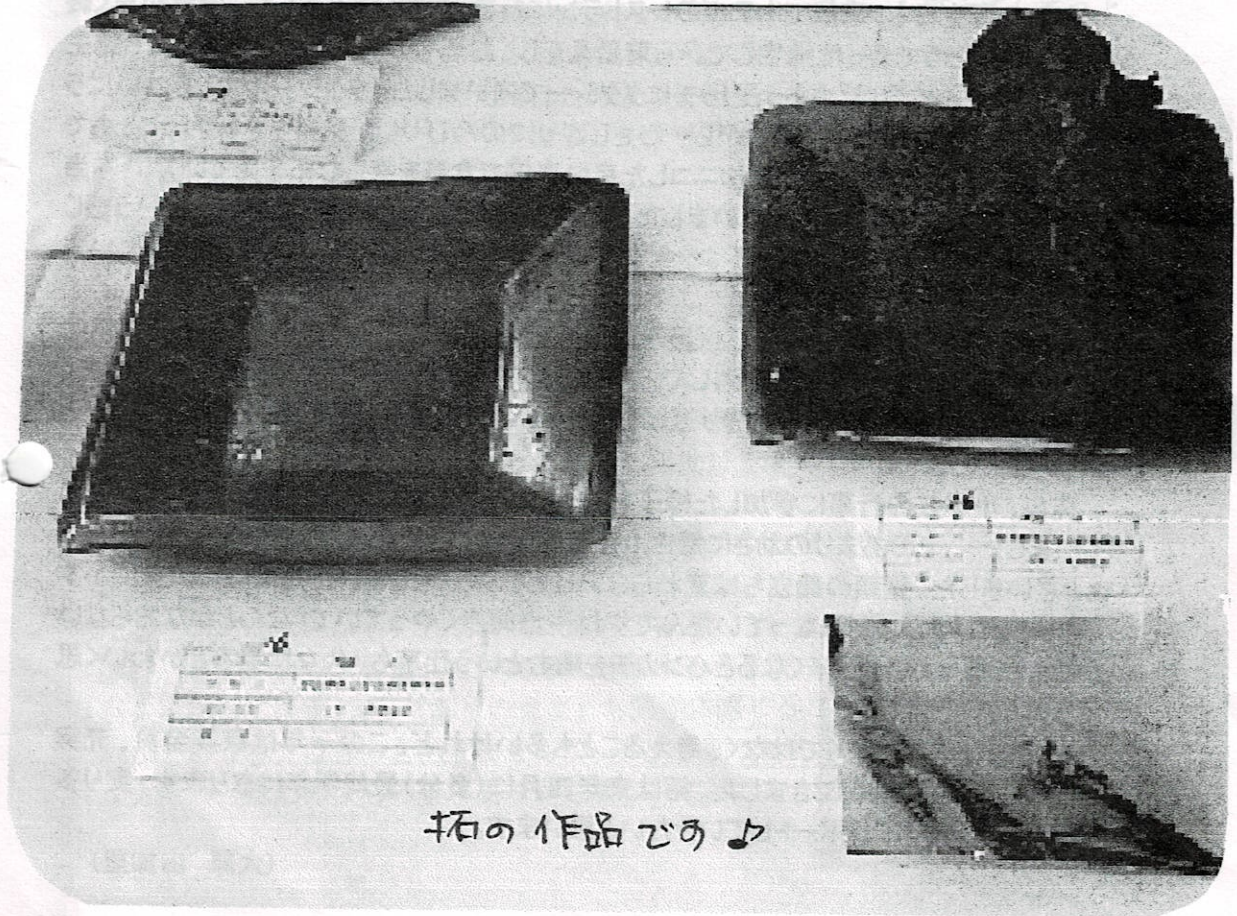
もくじ

18歳になりました ……2

普通について考える ……3

ノーマライゼーション学校支援事業フォーラム報告 ……4

書籍のご紹介 ……7



拓の作品ぞの♪



12月18日は拓の誕生日…ついに18歳になりました。親としては、なんとも感慨深いものがあります…。

この一年は、高校の授業も落ち着いて受けられ、今まで苦手だった移動教室や校外での活動も、対応を工夫するだけで参加できています。日中の活動である石陶房でも、ずいぶんと色々な仕事ができるようになりました。今までは苦手だったどろどろの粘土にも触れるようになり、エプロンをつけても洋服が汚れるほど、がんばって作業をすることがあります。陶器の腕も随分上がってきたようです♪

今年の誕生日も、家族でホテルのレストランに行き、お祝いをしました。授業が早く終わる日だったので、一度帰宅してから着替えをし、お酒ものめたらいいな～(私も誕生日なので)なんて思い、ちょっとリッチにタクシーで向いました。タクシー中で、きれいにライトアップされた町並みを見ながら…ひさしぶりにのんびりした気持ちを味わうこともできました。とても静かに、でもニコニコした良い表情で食事を楽しむ拓を見て、「本当に成長したなあ～」とうれしく思いました。おいしい料理よりも、心のご馳走！という感じでしょうか…今年のお誕生日は、今までで一番寛いでお祝いできたように思います。

帰宅してからケーキを囲んで、もう一度「ハッピーバースデー♪」をしましたが、拓はケーキのろうそくを一息で吹き消して、さっさと食べる準備です。つい最近まで、ろうそくを消すのが大好きで、何度も繰り返していたというのに！これも成長ですね～ちょっと寂しい気がします…

先日、小学校の行事に参加した様子を撮ったビデオを見ながら(ビデオをDVDに移していました) そのあまりの幼さに驚き！毎日顔を見ていると、変化がわからないんだなあと思いました。童顔の顔立ちは変わらないけど、ふっくらしていた頬はいつのまにかすっきりとした「大人顔」になっていたんですね～当時良くやっていた「なんとかなおらないかなあ」と思っていた、辛くなるとハンカチを噛むという仕草も、久々に見るとかわいく思えるのが不思議です。

毎日楽しい事ばかりではなく、考えることも多いけれど、この一年は家族全員、充実した日々を送ることができました。拓は来年四月に(多分)最終学年になります。実り多き一年になるよう、サポートしていきたいと思います。

(大原 由加里)



「普通」について考える



自閉症に加え、重度の知的障害を持つ子どもを育てていて、心がけていることがあります。たとえIQや発達段階から言うと〇〇才と言われても、心は18歳！18歳の心を持った男の子として接していこうと…。もちろん、話しかける言葉は拓也が解りやすいように気をつけますが、決して赤ちゃん言葉のような、年令不適當な話し方はしないようにしています。それが彼のプライドを保ち、成長を促すと信じています。

ご相談を受ける中や、当事者の親同士で話す中でよく「他の子と一緒にの対応でいいのに！」とか「ありのままを受け止めて、付き合ってくれれば…特別なことは求めてないのに」と周り方との考えの差異を聞くことがあります。考え方としては正論でも、この「普通」という言葉、意外と分かり難い言葉ではないでしょうか？例えば、学校生活において担任より「配慮」についてお話しがあったとして、「普通でいいです」または「他の生徒と一緒にいいです」と答えてしまうと、担任は困ってしまうように思います。特別な配慮はなくても良い場合でも、「〇〇は大丈夫ですが、〇〇になった時はこのように配慮していただけますか？」と具体的に一つでもお話しするほうが理解しやすく、信頼関係が築くことが容易ではないでしょうか？

上記の接し方に関しても「普通に」とだけ言ってしまえば、通常の話し方では、拓也はほとんど受け答えすることが難しく、内容もつかみにくくなってしまいます。しかし「こんな時には～という話し方をしてもらえると、本人が分かりやすいです」などと話しておく、周りの協力や理解が得られやすいと思いました。つきあう時間が長くなれば、自然にわかってくることでも、最初にある程度お話ししておく…それが私の考える「普通」でした。親が“ほんの少し”介入し、本人がスムーズに、色々な場に対応していける手助けをすることを第一に考えてきたように思います。

我が子は知的障害が重度であったため、このような考えを持ってやってきましたが、これが軽度の発達障害を持っている方では、困り感が違うので、考えも異なるものになるのかもしれませんが。最近「普通」という言葉の捉えは人によって違い、自分の思う「普通」はみんなに通用する考えではないのでは？と思うことが多くなってきました。「ありのまま」も同様に感じるがあります。何が正しいかという答えはきっとありませんが、子ども達の未来のため、周りで関わる色々な方々の、ほんの少しの歩み寄りが必要なのではないかと考えています。

(大原 由加里)